

報告①

鞠智城の調査・研究と成果

講演者紹介

長谷部 善一（はせべ よしかず）

熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館 館長。専門
は日本考古学（古墳時代）。学芸員。

平成三年熊本県教育庁に入庁。文化課、装飾古墳館、岩手県教育
委員会（併任）、文化庁（研修生）等を経て、令和四年四月から現職。

鞠智城の調査・研究と成果

歴史公園鞠智城・温故創生館館長 長谷部 善一

皆さん、こんにちは。歴史公園鞠智城。温故創生館の長谷部です。本日はよろしく願います。私からは、現在までの鞠智城の調査と研究の成果について報告をさせていただきます。

一 はじめに

先ほど小田先生から、鞠智城について今までどのような調査がされてきたのか、どのような方々が関わられたのか、さらに今後の課題にまでお話をいただきました。現在、鞠智城に携わっている者として非常に身の引き締まる思いです。小田先生の鞠智城へのあたたかな気持ちを感じているところでございます。

鞠智城は皆さんご存知のとおり、熊本県の北部、山鹿市と菊池市の境に位





置する古代山城です。現在はスクリーンに映しだしているように整備が進んでおり、子どもたち、地元の小学校が中心ですが、鞠智城の説明ボランティア会の方たちと一緒に鞠智城を学ぶシーンも多くみられるようになっております。(図1)

二 鞠智城と大宰府に関わる研究史(図2)

(一) 鞠智城築城とTSMCの熊本進出

現在、熊本県の菊池市及びその周辺は、台湾の半導体メーカーTSMCの工場進出があり、地域自体全国から注目されるとともに大きく変わってきている地域です。この状況は、鞠智城が千三百五十年ほど前に菊池郡と山鹿郡の境に築城された時と非常に状況が似ているのではないかと私たち鞠智城を研究している者は感じています。

鞠智城が在るのは菊池郡の西端で、現在の山鹿市菊鹿町米原と菊池市堀切です。この山中にヤマト政権の発注で渡来系の人、百済から来た人々の指導を受け鞠智城が築城されます。当時、人々は竪穴建物に住んでいた。そういったところに、城門・土塁を巡らせ、大

鞠智城築城とTSMCのくまもと進出

—鞠智城築城当時と、今のくまもと—



- 菊池郡米原の地に当時、東アジアでの最先端の技術をもつ古代山城の築城。
- 築城後には“車路”官道と、後に作られる“西海道”が連結し、鞠智城と大宰府の連絡路の強化。
- 菊池郡（西寺遺跡カ）、山鹿郡（御宇田遺跡）、合志郡or山本郡（上鶴頭遺跡）など官衙の建設。

- 菊池郡菊陽町に世界でも最先端の技術をもつ半導体メーカーが進出。今後
- 建設後には渋滞緩和策として中九州横断道路の建設促進。
- 周囲には国内大手の半導体メーカーなど、関連施設の建設ラッシュ。

型掘立柱建物群が建築されます。菊池川流域に住んでいた人々は、非常に大きな驚きをもったのではないかと思います。

スクリーンの右写真は、TSMCの第一工場が建設されたところ
です。この隣には今後、第二工場が建築されますので、更に大きな
施設群となっていくと思います。鞠智城も、最初は狭い範囲の中で建物群
の建設が始まっております。唐・新羅連合軍の侵攻に備えて、まず
中枢の施設、掘立柱建物と外郭の防御施設、城門・土塁線をつくり
城としての最低限の機能を整備しますが、同じようにTSMCの工
場も最初は中核施設、事務所棟、第一工場が建設され、第二工場が
でき次第に様々な役割が広げられていくようです。

古代においても鞠智城が築城された後に、菊池郡や山鹿郡が存
在する菊池川流域において鞠智城を補完するような施設群が建設
され始めます。鞠智城が官衙的な役割を担うようになった鞠智城
Ⅱ期以降、官衙的機能を補完する建物群が鞠智城の近くに相次い
で建てられます。例えば、菊池郡においては、菊池郡家と想定さ
れる西寺遺跡がありますし、山鹿郡でいえば、山鹿郡家と想定す

る方もいる御宇田遺跡が山鹿市鹿本町にあります。いずれも鞠智城から歩いて一、二時間で行ける距離のところに、鞠智城と同時期に官衙が作られていたのです。

さらに今回、T S M Cの北側には、将来的には中九州横断道路に繋がる高規格道路の整備が始められています。前熊本県知事の蒲島郁夫さんのときに路線が決定されましたが、九州縦貫自動車道と接続し、福岡市からも一時間以内で来ることができる道路がつくられるのです。鞠智城の時代にも鞠智城の南、菊池平野、菊鹿盆地の中に「車路」と呼ばれる、今の国道に近い官道が作られています。それが大分県と熊本県、当時の豊後と肥後、そして肥後と筑後といったところを繋いでいました。

以上、現在のT S M Cの進出が鞠智城築城と非常に類似しているところを紹介しました。

(二) 鞠智城の役割

それでは資料三十五ページをお開きください。スクリーンを見ていただいても構いません。まずは鞠智城の役割というところからご説明をします。(図3)

六国史に記された鞠智城というものが、どういう城か、どこにあるのかについては江戸時代から議論がされてきました。『肥後国誌』、『菊池風土記』等の書物には、鞠智城が米原よなばるの地にあるのではないかと記載があります。先ほど小田先生のお話しの中でもありましたが、昭和に入ってから地元の研究者である坂本経堯先生さかもとつねたかが中心となってこの地を発掘され、鞠智城の遺構、遺物を確認なさいました。その調査をもとに、坂本先生は鞠智城の

鞠智城の役割

鞠智城研究学史からの視点

地元研究者である「坂本経堯」氏が提唱された、

- ①有明海に侵入した外敵への備え
- ②大宰府へ兵站基地
- ③九州南部への備え

のいずれの説とも現在でも議論され、結論には至っていない。それだけ当時としては斬新な視点であったことが窺える。

現在でもこの3案を軸に鞠智城の役割は活発に論じられている。

それだけ今でも鞠智城研究には多くの研究の余地が残されている。

坂本先生が提唱されたこの鞠智城の三つの役割は、現在も鞠智城研究の基本で、この説をベースに様々な意見が先生方から出されています。資料三十五ページには、これまでの研究者の方々が提唱されている意見を集めてみました。詳しいところは、また皆さんお帰りになつてから読んでいただければと思います。

ここからは私見を挟みながら説明させていただきます。スクリーンをご覧ください。九州北部地域の古代山城群と鞠智城を含めた位置を確認するため、東シナ海上空から東を俯瞰してみました。(図4)

有明海の奥には北部九州の古代山城群、さらに奥の方には瀬戸内海の古代山城群をみることができます。赤い印をつけているところが鞆智城です。

東シナ海から島原半島を回って有明海に入り北に進むと、現在の筑後川の河口部に行きあたります。そこには神籠石系の古代山城であるおつぼ山神籠石、帯隈山神籠石、高良山神籠石そして女山神籠石が山地や丘陵を背にして点在しています。もし、外敵が有明海から熊本平野に直接上陸してくる場合には、おそらく鞠智城が対応することになるとと思いますが、有明海を北上していった場合、筑紫、当時は大宰府があつた方面に進まれた場合には、帯隈山神籠石とか高良山神籠石といった神籠石系の古代山城が正面ということになってくるかと思います。

鞠智城は熊本平野に上陸された場合は先ほど言いましたように、鞠智城が外敵への対応することになりますが、鞠智城の立地を考えると、熊本平野と筑紫平野両方へ上陸された場合でも、両面で対応できたと考えます。基肄城以南には朝鮮式山城と定義される城は鞠智城しなかない。そのような環境下におかれた鞠智城には、大野城・基肄城ほどの緊張感はないにせよ、城としての規模や機能など役割が与えられていたと考えます。鞠智城は大宰府から離れた地域にあ

鞠智城と有明海

有明海から見た北部九州の古代山城群

- 東シナ海から有明海に進入すると、正面に熊本平野が所在し、平野を望む低丘陵上に鞠智城が所在。
- 有明海に進入し北に転ずると筑紫平野が所在し、平野を望む背後の低丘陵上にはおつぼ山・帯隈山・高良山・女山の各神籠石系古代山城群が所在。
- 鞠智城は、熊本平野付近に上陸した場合には最前線としての基地、筑紫平野に上陸した場合にはその支援を行う城として、私は守る面と攻める面との両方の機能を併用した「押し出しの城」を提唱する小田先生の説を支持したい。



図 4

りますが、軍事基地としての城の機能を備えている以上は、そういった機能があったと思います。

一番下に赤で書いていますが、私は、基本攻めてきたら守り戦う、そして筑紫平野に上陸された場合はそちらを支援する、そして普段は兵站基地としての肥沃な穀倉地帯である熊本平野を背景に、兵站基地としての役割を担う、これが鞠智城だったと考えています。おそらく当時のヤマト政権においても主戦場は大宰府方面を想定していたと考えます。その背後になる肥後北部地域には様々局面で対応が可能な、朝鮮式山城としての規模と機能を有する鞠智城が築城されたのではないかと考えています。

これらのことから考えますと、小田先生が提唱される「守る」と「攻める」両方の機能を持たされた押し出しの城との考え方が鞠智城の役割りには一番しっくりくるのかなと考えています。

三 鞠智城調査研究の成果

続きまして、これまでの鞠智城の調査研究の成果について説明します。鞠智城は五期にわたる変遷がこれまでの調査と研究の中で分かっています。創建期（Ⅰ期）、隆盛期（Ⅱ期）、転換期（Ⅲ期）、変革期（Ⅳ期）それから終末期（Ⅴ期）に整理されています。

創建期・鞠智城Ⅰ期（図5）

まず、鞠智城の創建期です。七世紀後半に城としての最低限の機能を整備し、そこに駐屯する兵士が起居する

隆盛期・鞠智城Ⅱ期（図6）

創建期

韋智城 I 期

軍事拠点としての最低限の機能が緊急的に整備された。

[illegible]

この時期に鞠智城では、堀江・堀切・堀
ノ尾の古城門や南宮・西宮土塁跡を含む
外郭堀が構築され、城としての機能が高

道に整備されました。また、域内には、長野県東部の長野市山深川から長野市山深川第一、長野県東部地区中部地区にかけて、長野市山深川に整備されたと考えられる屋敷建物群が確認され、城域北側の吾田には貯水池が造成されました。

この時期に、城として利用される施設が整備されたように思いますが、確認された屋敷建物の構成は多岐多様で、柱組の庫が少なく、小型の屋敷建物が多い傾向にあります。これは、外周壁が途途に整備する一方で、域内施設の整備としては十分に平らになされたことが考えられます。



■：鞠智城Ⅰ期の建物

- ・ 城としての最低限の施設の整備（城門、土塁線、貯水池及び管理棟など）の整備。
- ・ 土塁線には「版築」技術の導入、貯水池には堤防状遺構に「敷粗朶」工法など当時の最先端技術、いわゆる渡来系技術が用いられる。



■胸背域1期の建物



■ 貯水法



■ 港人用門路

15号建物群は、自然環境の豊かな武蔵野のふもとに広がる住宅群で、年月を経ても、見事に25.5mの建物の高さが、周囲の低く大衆の建物と対比し、街並みに個性を与えています。向かいに緑豊かな住宅「月丘」として建物を並置しています。

城を管理する建物や八角形建物など
城内の施設が最も充実した時期

この時期は、駒智城の築城期にあたり
ます。最寄馬場区画部から「馬場地区」を
一帯にかけて、「コ」字型に配置された竈
形建物や竈形の倉庫群が出現する
など、建物の配座に大きな変化が生じて
います。南北に配置された2棟の八
角形建物が出現するこの時期です。
これらの時期は「馬場地区」に記載され
て「駒智城の築城の時期」にあたりま
す。駒智城の建物は「駒智の管理・
運営」のため中野馬場とつながり、城内
部の市街地を隔てられ、城とされた。

能が十分働いたのがこの時期です。また、日常生活に用いる土器の出土量が最も多い時期でもあり、施設の使用が図られるとともに、城の管理や運営に各人の人員が配属されたことが推察されます。

出土した土器の大半は煮炊器ですが、これらの煮炊器には、福岡県大野城町一帯の古墳時代群葬墓のもの、熊本県宇城市周辺の手製縄文器で製作されたものが認められます。また、一応認められ土器群には縄文と呼ばれてよく知られた縄文内土の土器群とあわせて、縄文時代後期の土器群

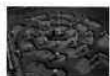


■ 鞠智城跡Ⅱ期の建物

- ・施設の拡充。『続日本紀』689年にみられる大野城、基肆城、鞠智城の「繕治」に該当。
- ・「コ」の字型掘立柱建物群、朝鮮半島に由来する“八角形建物”の建設。
- ・土器の出土量も最も多いことから、鞠智城の機能が充実した時期。



■ 土曜



■人角形建物



(左)八角形遺跡跡地状況 (右)復元された八角形遺跡

[illegible]

智城のシンボリックな建物として復元しておりますが、こういった建物もつくられた時期になります。

轉換期・鞠智城Ⅲ期（図7）

続きまして転換期です。八世紀前半から中頃にかけての時期になります。鞠智城の建物は地面に穴を掘つて柱を建てる掘立柱建物が最初に建てられるのですが、この時期には、小型の礎石の上に柱を建てる礎石建物へと転換していきます。この礎石建物への構造的な変化は、建物を長持ちさせるためと考えられます。

また、転換期には、貯水池から木簡が出てきております。「秦人忍□（米カ）五斗」と書かれていますので、鞠智城内に米を貯蔵し始めた時期なのかな、とも思います。荷符木簡が付けられた米が持ち込まれ、礎石建物によって米が備蓄される、そういった仕組みが分かってくる時期になっております。

ここでは途中ですが、ここ大事なところです。スクリーンの右半分には、鞠智城の土器の出土量と組み合わせを、時期ごとに図示しま

変革期・鞠智城Ⅳ期（図9）

それでは続いて変革期です。八世紀中頃から九世紀の中頃にかけてです。先ほど小型の礎石建物が増えて転換が図られたと言いましたが、この後、今度は礎石が大型化していきます。そして礎石建物の倉庫が建ち並ぶ時期になってきます。

鞠智城Ⅲ期までは官衙的、役所的な機能を備えていたのではない
か言っていました。そのような建物がなくなり、倉庫が建ち並ぶ
風景が鞠智城に広がっていきます。そして、この時期の『文徳実録』
には、「礎石建物が燃えた、不動倉十一字が焼失した」という記事が

变革期

鞠智城IV期

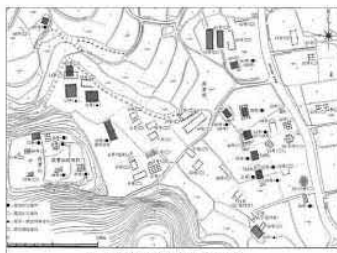
礎石建物が大型化。食糧等の備蓄施設としての機能が大きくなる。

この時局は、戦前或の重要期にあたり
ます。従って各地実地調査に伴い、戦
前戦中両期の史実を援用し先づ遺物
から大體的事象を決定し諸石造物の
陳て置いと行われるなど、遺物の見解
が固められてゐる。その時に於いては、実定正
統の金貨が事々舊に於いてないと思れ
ます。次に、銀貨を鑑定料とする特殊な諸
石造物が出現する一否、二、半円板状の
造形物が消失するなど、造物の様式に大
きな変化が生じてゐる。

このような変化は野水田の周辺にのみ見られ、野水田を占める面積の大部分が放棄されて灌漑が放棄されるのもこの時期からになります。また、この時期の終わ

今頃は、池ノ門町の石畳の道も全てで
あるようです。この時期の鎌倉建物は、
寺の僧侶に火災被害が起これると、
事柄として扱われます。これは江戸
末の文政忠孝録、文政5(1823)年春の
新嘉村の火災記事との関連が想像でき
ます。

この時期は、建築物の焼失、狩火の
焼失の低下など、城の焼失が実証した
限りであり、特に建築物の焼失記録との
重複が大きいことが考えられます。ま
た、土曜にのみ、また紀元前400年
に焼失の一部に認められるもの、そのほ
うな土曜焼失であり、市街地の狭いもの
とされています。



■: 鞠智城跡Ⅳ期の建物

- ・「コ」の字型配置の建物群がなくなり、建物の構成が倉庫へと変化。礎石建物の大型化。
- ・礎石建物の礎石に火災痕跡が認められるなど、『文徳実録』天安2年(858年)の条に記載のある不動倉11棟の焼失記事と関係。
- ・出土する土器が須恵器から土師器主体へと変化し、在地色が強まる時期。食料を貯蔵する倉庫群へと変化。



■ 飛騨城IV期の建跡

20号建物群は、高度原野の中心部に
置かれた孤立した個体建物群で、建
3階は2m、地下4階(10m)の地味な
建物群です。光によって変化した色
性がよく、夜間からは其の光景が
「美し」てゐます。夜間には静寂は
「美し」て建物や光景といふです。



1000

出ています。長者山、長者原地区の発掘調査では焼米が大量に出土していますが、そういった米を貯蔵する倉庫としての機能が充実した時期になってくると思います。さらに出土する土器が須恵器を中心とした広域に流通する、牛頸窯跡群や八女古窯跡群（福岡県）の須恵器が鞠智城で減少し、代わりに肥後国内で作られる須恵器や土師器の出土量が増加する時期になっています。この時期を境に鞠智城が、大宰府の管理から肥後国もしくは菊池郡の管理に移っていったのではないかと考えられます。このように、鞠智城にとっては大きな変化があった時期と考えています。

終末期・鞠智城Ⅴ期（図10）

続いて、鞠智城の終末期です。九世紀中頃から十世紀中頃までです。この時期には『日本三代実録』に、「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」「肥後国菊池城院兵庫の戸が自ら鳴る」など、怪奇現象の記事の報告が増加します。このように管理の面からも不安定な時期を迎えた鞠智城では、建物群も徐々に減少し、土器の出土量も

終末期

鞠智城Ⅴ期

食糧等の備蓄施設として存続。
しかし、10世紀中頃には城としての役割を終える。

この時期は、鞠智城の終末期にあたります。この時期には、『日本三代実録』に「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」「肥後国菊池城院兵庫の戸が自ら鳴る」など、怪奇現象の記事の報告が増加します。このように管理の面からも不安定な時期を迎えた鞠智城では、建物群も徐々に減少し、土器の出土量も

この時期は、鞠智城の終末期にあたります。この時期には、『日本三代実録』に「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」「肥後国菊池城院兵庫の戸が自ら鳴る」など、怪奇現象の記事の報告が増加します。このように管理の面からも不安定な時期を迎えた鞠智城では、建物群も徐々に減少し、土器の出土量も



■：鞠智城跡Ⅴ期の建物



- ・鞠智城の最終末。貯水池の下流側半分は機能を継続しており、大型の礎石建物も立て直しが認められることから、城ではなく倉庫群として機能。
- ・『日本三代実録』天慶3年（879年）「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸がおのずから鳴る」と記載あり。
- ・貯水池の機能が停止する10世紀第3四半期をもって鞠智城は廃城したと考えられる。

図10

減少を始めます。創建期からありました貯水池も、下流側から埋まり始め最終的に十世紀に入るとその利用は低下していきます。最終的には、貯水池が管理されなくなった十世紀の第三四半期頃に鞠智城は終焉を迎えます。

四 おわりに

今まで鞠智城は非常に長く調査されてきましたが、簡単に早足で見えていくと、このような五期の遷り変わりの中に調査成果を収めていくことができます。

私の資料には「これからの鞠智城研究」と題して「鞠智城の範囲についての検討」、「鞠智城に関連する周辺遺跡の研究」及び「鞠智城出土文字史料と菊池郡内の墨書土器等研究」を載せております。これは後程シンポジウムの中で、小田先生のご意見も伺いながら、言及していきたいと思えます。

歴史公園鞠智城・温故創生館からの報告は、これで終わらせていただきます。